

紹介

紅學界の現状簡介

(一)

最近の紅學論著の中で最も目立つ言葉は「藝術」である。

より多くの時間をかけて作品そのものを研究する必要がある、これが我々の出發點となる。我々は長年政治學や政治經濟學の角度から研究を進めることに慣れ、思想と藝術を分離し、政治を藝術に代用して孤立的に小説の政治傾向を研究することさえあった。これと関連して藝術の創作規律や表現方法を探ろうとする空氣は乏しく、學界では藝術科學の面で重要な意義をもつ新しい課題は實際上あまり提出されなかった。こうした狀況は明らかに改めねばならない。まず《紅樓夢》を藝術と認め、思

紹介

想と藝術を不可分の統一體として考察し、そして《紅樓夢》の創作體驗を深く追求し、それについて美學や創作規律の面から解説し、結論を出してこそ《紅樓夢》研究を推進できる。⁽¹⁾

こうした意見は文化大革命（十年浩劫）、或いは更に遡って解放後三十年の研究傾向に對する一つの反省と言えるだろう。藝術手法・藝術辯證法・藝術技巧・藝術結構といった言葉が論文題目として頻用され、《紅樓夢》の藝術性が追求されている。その出發點は、

《紅樓夢》の價值となると、これは中國の小説の中では本當に得難い。その要點は如實に描寫して憚りも飾りも無く、從來の小説が善玉はあくまで善、惡玉はあくまで惡としたのとはまるで違い、それゆえ登場人物が皆本物だということだ。要するに《紅樓夢》の出現以後、傳統的な考え方や描き方はすっかり打破された。⁽²⁾

という魯迅の言葉であり、多くの論文がこれを引用しつつ具體的分析に踏み込んでいる。⁽³⁾

その構成は決して中國章回小説傳統の人物の傳記を連結する「水滸方式」ではなく、中心人物の性格の發展に從う構成、つまり單線ではなく複線の發展、「二輪の花が別の枝」ではなく「一つの口から二つの話」である。⁽⁴⁾

所謂「反面人物」についてもその高い藝術性が評價され、

薛寶釵という形象には作者の複雑な感情・深い感慨がこめられる。彼はこの美少女の聰明さを讃え、不幸な運命に同情するが、彼女が奴隸のように封建禮教を信奉することを強く惜しみ、その「隨分從時」の處世哲學を批判する。作者が描こうとしたのは、拔き出した才能と善良な心を持った一人の少女が封建禮教に毒され滅ぼされていく過程である。だからこそ作者は寶釵の性格の發掘に倦むことなく、きめ細かい筆致で彼女の性格の美しく健

康的な要素と陳腐で人を窒息させる要素との矛盾めいてはいるが奇妙な統一を展開する。これこそ寶釵という典型形象の根本的特徴だ。⁽⁵⁾

曹雪芹は生活の辯證法を尊重し、王熙鳳を徹底した悪人とは描かず、この邪惡な性格を浮き彫りにする時、讀者に親しまれる彼女の一面も描く。その動機と効果は王熙鳳の美化でなく、存在感に富む生き生きとした反面文學典型の創造だ。⁽⁶⁾

と、「抽象的觀念の敷衍」として彼女達を捉えることから抜け出している。もっとも寶釵の《柳絮詞》(第70回)や《撲蝶》(第27回)について

「我を送って清雲に上す」の句は從來名利に熱中し、ひたすらのし上がろうとする確證とされてきた。實の所「青雲」は古人の詩文の中で「高空」「清高」を指すことが多い。……「青雲」を名利に熱中するとだけ解釋す

るのは無理だ。……ずっと譏られてきた《撲蝶》は事柄そのものから言えばその時の目的は「嫌疑を避ける」で、「禍いを轉嫁する」ではない。⁽⁷⁾

とまで主張するのはまだ少数派のようだが、各場面の評價が今後どう變つて行くか興味が持てる。魯迅の言葉は今でも有効だ。

《紅樓夢》は多くの中國人が知っている、少なくとも名前だけは。作者・續作者が誰かはさて置き、主題だけでも讀者の見方は様々だ。經學家は《易》を、道學家は淫を、才子は纏綿を、革命家は排滿を、流言家は宮廷の祕事を見出すといった具合に。⁽⁸⁾

藝術性を論ずるなら「眞假」の問題は見逃せない。まず文革中の見解を引く。

乾隆という封建統治が最も酷く、文字獄の絶え間無き暗

紹介

黒時代に、一作家がどうして「時を傷み世を罵る旨」を直書して時の政治を曝け出せようか？ 眞實は語れぬが、語らねば氣が濟まぬ。曹雪芹は已むを得ず「眞事を隠し、假語村言を用いてごまかす。」彼は苦心を重ね、十年の歳月を費して「泪を滴らせて墨を爲し、血を研いで字を成し」、生涯「遇う所、聞く所、見る所」の社會現象を集中し、その中の矛盾と鬭争を典型化して生き生きとした藝術形象を作り上げ、形象化された封建末世四大家族の興衰史を展開した。「眞事」とは雍正・乾隆朝の政治鬭争のことで、藝術形象全體の中に巧妙に溶かし込まれている。⁽⁹⁾

所謂「掩蓋」説の代表例で、「政治歴史小説」なる言葉とともに文革以後槍玉にあがる。⁽¹⁰⁾

《紅樓夢》は事實上政治鬭争を描いたと言う。作者は文字獄を恐れて情を談じて政治鬭争を隠蔽する一方、讀者の理解不能を顧慮し、「賈雨村」「甄士隱」という二つ

の名を巧妙に用いて、愛情と婚姻という「假語村言」から政治闘争という「眞事」に氣づかせようとしたが、この「眞事」とは雍正・乾隆兩朝の皇室の内紛だ云云とも言う。しかしこうした玄妙な解釋は《紅樓夢》のもつ豊富な社會内容や完璧な統一體という藝術的成就、「石兄」の議論の中で主張した現實主義の創作思想と矛盾し、「眞事を隠す」や「假語村言を用いる」の本來の意義を正しく解明できない。⁽¹²⁾

その玄妙さは「清の世祖と董鄂妃のために作る」⁽¹³⁾や「明の滅亡を弔い、清の過失をあばき、とりわけ漢族の名士で清に仕えた者への痛惜の意を寓す」⁽¹⁴⁾と唱えた索隱派と相通⁽¹⁵⁾⁽¹⁶⁾では現在はどう捉えられているのか。

「眞事」とは文學創作が據り所とする現實生活の中の原料のことだ。社會生活の中の「眞事」は素材として作家の頭腦に反映し、その加工を経て文學作品中の典型人物・事件を生み出す。「眞事」は文學創作の基礎だ。……

「假語」とは現在よく言う一つの藝術創作方法——虚構のことで、「村言」とは大衆化した俗言口語を指す。⁽¹⁷⁾

こうした捉え方は「眞假」を直接テーマとしない論文でも既に一般的だが、これを補強するものとして寶釵の繪畫についての講釋が引かれ、⁽¹⁸⁾

第一回の「作者自ら云う」が文藝の眞實性、つまり「眞事」の創作に於ける重要性を強調しているとすれば、此の回の寶釵の畫論は想像や虚構といった典型化の手法の重要性を強調している。⁽¹⁹⁾

と結びつける展開も定着している。更に「黛玉詩を教え、香菱詩を學ぶ」(第48回)から

自然(natural)・現成(apt)・有景(vivid)・新鮮(original)^{補(1)}は黛玉が詩を稱える言葉だが、《紅樓夢》全體にこれと相通じる印象を受ける。《紅樓夢》はその豊かな藝術性

により、華麗な建築群に於いて大小様様の美しい建物が独自の様式と適當な位置を占めつつ全體としての藝術的偉容を形造るといふような緊密な構成美を展開する。⁽²⁰⁾

と指摘する聲もある。(黛玉の詩論は嚴羽に基づく)⁽²¹⁾

ところで「眞假」に關連する「文字獄」については文革中の論文と同じく

《紅樓夢》のような獨特の藝術風格の形成原因は色色ある。社會的原因では、曹雪芹は中國封建社會最後の專制王朝に生まれ、文字獄と嚴しい思想統制のために「眞事を隠し、假語村言を用いてごまかす」といふ藝術的手段を採らざるを得ず、その言葉遣いは往往にして「譎に似て正、則に似て淫、《春秋》の微詞有り、史家の曲筆多きが如し」(戚蓼生《石頭記》序)、また脂硯齋の言う「畫家の煙雲模糊の處」である。⁽²²⁾

と、その影響力を認めて「ざるを得ず」論を採るのが主流

紹介

だ。「ざるを得ず」論の言う消極的動機説と創作の本質とも言うべき虚構を認識したとする積極的動機説とは、藝術性の評價という潮流の中で今後どう折り合いをつけていくのだろうか。その意味で次のような見解は傾聴に値する。

なぜ「少しも時世に涉らず」といった釋明をしたのか？もとより「當時の危険な政治環境にあつて文字獄を逃れようとした狡猾な言い回し」とか「意識的に設けた『假語村言』の迷彩」と解釋もできる。だがこうした解釋には十分な説得力が無い。……冒頭でちよいと時の政治に關わらずと釋明さえすれば、あとは忌憚なくやっても大丈夫なのか？まさか封建統治階級は馬鹿揃いで、堂堂と時の政治を批判した箇所⁽²³⁾についてもニセ釋明のために氣づかなかつたなどという筈はあるまい。⁽²⁴⁾

「眞假」の概念が單なる韜晦策ではなく、作品の本質と深く關わることだけは確かだ。

言語藝術については文句なく評價が高い。「中國文學史

上最も偉大な言語の先生」と認められる。

- (一) 表現上の最大特徴は大量に會話を用いたこと。
- (二) 會話も獨白も、人物の身分に符合する。彼の方法は「聲を以て神を傳う」だ。
- (三) 言葉の含蓄の深さ。何でもない言葉がわかるようにならない。

四 固定した環境の中であれほど多くの人物と似通った事柄を描きながら、重複・單調・無味乾燥といった感じが少しもない。豊かな言葉を持たず、手法の變換にだけ頼ったのでは成功しなかつただろう。⁽²⁵⁾

《紅樓夢》を論ずる際に大きな影響力を持つのが所謂「脂硯齋評」だが、それをどう捉えるかについては評價が食い違ふ。全面否定論者は

曹雪芹の死後脂硯齋は名を盗み世を欺き、八十回だけ世に出して、後四十回については曹雪芹在世中に「迷失」

したと言つて人人を騙した。曹雪芹の遺言執行人を自任する脂硯齋はまず著作權を奪い、意義の極めて深い《紅樓夢》を石器時代にしか意義の無い《石頭記》に改め、また意圖的に後四十回を「迷失」して四大家族と封建制度の崩壊過程を隠蔽しようとした。残る前八十回も脂評に汚され歪められた。一芹一脂の間に展開された鬭争は重大だ。⁽²⁶⁾

と手厳しい⁽²⁷⁾。その徹底ぶりに對してもちろん

脂評が「迷失無稿」と言う時には、いつも無念の思いを表明しており、他の證據が無い限りは偽らざる氣持と信じるしかない。それを煙幕を張つたと考えられようか？⁽²⁸⁾

と、證據の無い主觀による決めつけを戒める意見もある。

「脂硯齋評」については

脂硯齋は《紅樓夢》の生活基礎・創作方法・主題思想・

人物塑造・情節・構成・言語・細節の描寫について全面的な評論と探究を進めた。これは《紅樓夢》という偉大な作品の藝術經驗に對する理論的概括の最初の試みである。成功した箇所もあれば失敗した箇所もあるが、どちらの場合にも意義があり、我々の重視と研究に値する。⁽²⁹⁾

という扱いが穩當だろう。

脂評は陳腐な俗套を破る創作精神を強く求めた。……またいつも人物の言語の性格について言及した。批語の「其の聲を聞いて其の人を知る」である。……また長篇小説の藝術的構成についてすぐれた見解を示した。⁽³⁰⁾

脂批中の「眞に是の事有り」や「眞に是の語有り」が指すのは情理になつた「有るべき事、有るべき言」ということで、これを「實在した事」や「實在した言」と考へるのは多分脂硯齋の原意に合うまい。⁽³¹⁾⁽³²⁾

金聖歎の影響を強く受けた脂硯齋を小説批評の流れの中でどう位置づけるかが今後の課題になりそうだ。

(二)

曹家の家世を探る上で注目されたのが《五慶堂重修遼東曹氏宗譜》である。宗譜には始祖が曹良臣、二世が泰・義・俊と記されるが、これについて馮其庸氏は次のように結論づける。⁽³³⁾

(一) 五慶堂の本當の始祖は曹俊。

(二) 曹雪芹の上祖は俊の第四房、五慶堂は第三房。

(三) 曹家は天命天聰年間(一六一六〜三六)には漢軍旗、後に滿洲正白旗に屬す。

(四) 曹家の本籍は遼陽で、後に瀋陽に遷る。從來言われてきた河北豐潤ではない。⁽³⁴⁾

馮氏の研究は單行本にまとめられた。⁽³⁵⁾ 四房の最後第十四世には「天佑顯子官州同」とあり、馮氏は

曹雪芹は馬氏の遺腹子ではないかという説もあつたが、⁽³⁶⁾
《五慶堂譜》の出現によって成り立たなくなつた。⁽³⁷⁾

と述べ、曹雪芹を曹頌の子とみなす。曹雪芹が誰の子なのかについては残念ながら結論が出ていない。遺腹子説を否定するのに批文中の「鵝鴿の悲、棠棣の威」⁽³⁸⁾「嚴父の訓」⁽³⁸⁾「父兄の教育の恩に背く」を根據にして、「曹雪芹には兄と二人の弟があり、『嚴父の訓』を受けたのだから、絶対に遺腹子ではない。」⁽³⁹⁾と言う人もいる。しかし一方

雍正六年に曹家は査抄された。この時曹雪芹はわが身わが家の不幸を痛感する。天命は「不祐」なのにこれ以上「天祐」と言えようか、時代は變つたのにまだ厚かましくも「天祐」と稱するのは自分に對する大變な嘲弄だ。昔陶淵明は王朝交代の際に陶潛と改めたが、そこには舊きを除く意を寓していた。それを聞いて行動に移した古人は少なくない。だから曹雪芹もこの時「天祐」から「霑」に改めたわけだが、舊名は用いなくなったものの

實は内在する關係がある。古人の名字は義の相應⁽⁴⁰⁾するものを取るが、霑と天祐は多分《詩經》に由來する。⁽⁴¹⁾

と改名説を唱える研究者も少なくない。⁽⁴²⁾馮氏も改名説を支える資料の不足に慎重な態度を取りつつも強い興味を示している。⁽⁴³⁾

曹雪芹の卒年については壬午除夕説と癸未除夕説とがあり、前者は全面的に、後者は除夕の部分

能解者方有辛酸之淚哭成此書壬午除夕書未成芹爲淚盡而逝余嘗哭芹淚亦待盡每意覓青埂峯再問石兄余不遇顛頭和尚何悵々

という甲成本第一回眉批に負うが、胡適以來

能解者方有辛酸之淚、哭成此書。壬午除夕、書未成、芹爲淚盡而逝。余嘗哭芹、淚亦待盡。每意覓青埂峯再問石兄、余(奈)不遇顛(顛)頭和尚何! 悵悵!

と讀まれてきた。これに對して梅挺秀氏は

(1) 能解者方有辛酸之淚、哭成此書。壬午除夕。

(2) 書未成、芹爲淚盡而逝。余嘗哭芹、淚亦待盡。每意

覓青埂峯再問石兄、余(余)不遇類(癩)頭和尚何！ 悵

悵！

と二條に分けて句讀を施し、「壬午除夕は雪芹卒年の記載でなく、畸笏叟が批を施した日付だ」と主張して兩除夕説を否定、甲申春逝世説を唱えた。⁽⁴⁴⁾ これを受けて徐恭時氏は更に考證を加え、

亡くなったのは乾隆二十九年甲申、仲春二月十八日春分

——陽曆では一七六四年三月二十日。⁽⁴⁵⁾

と斷定する。⁽⁴⁶⁾

話は前後するが、馮氏を代表とする曹氏家世の研究に對して批判が無いわけではない。曹雪芹と《紅樓夢》という

紹介

研究の原點からすれば、

《五慶堂重修遼東曹氏宗譜》についての研究は最早《紅樓夢》や曹雪芹の研究領域を超えており、「紅學」を「曹學」に變え、譜牒學の範疇に屬するものだ。曹雪芹の十代以上の祖先に溯って數十名もの人に言及し、數十萬言の考證をやっても、曹雪芹とは全く無關係なんだから、彼を理解し《紅樓夢》を研究することにとっては少しも意味が無い。⁽⁴⁷⁾

これについて馮氏は次のように述べる。

諷刺的鄙視的態度で「曹學」という言葉を取り扱い、それをまともな學問と認めないようなことはすべきでない。そのように杓子定規に學術領域の變化と發展に對處するのは學術發展の規律に合うまい。「紅學」だって初めは認められず、鄙視される目に遭ってきた。⁽⁴⁸⁾ だが學術發展の規律は「紅學」が存在し得るのみならず、世界性をも

った學問となつたことを證明し、初期の嘲弄は逆に學術史上のお笑いぐさになつてしまつた。現在の「曹學」の立場はかつての「紅學」のそれに似ている。だが學術は發展し前進するものだから、「曹學」が生まれた以上、どんな鄙視や嘲弄もこの學問の發展を阻み切れない。そこで我々は全力でこの學問を推進すべきであつて、現在の段階に停めていてはならない。⁽⁴⁹⁾

馮氏は續けて《紅樓夢》研究での分業の必要性を強調する。乏しい資料と錯綜した假定から導き出される様々な見解——「一人の紅學者に紅學の一切を研究するように要求することはできない」というわけだ。《紅樓夢》の本文を熟讀玩味して内容を剖析した時代⁽⁵⁰⁾のようにはいかないらしい。《紅樓夢》に康雍乾三朝の史實、とりわけ曹家をめぐる史實とを強く結びつけようとしたのが文革中の傾向であり、その要請に沿つて曹家に關する檔案史料も刊行された。⁽⁵¹⁾周汝昌氏の《紅樓夢新證》が増訂出版されたのも同じ理由からだろう。(目錄で見た限りだが《新證》の幾つかの部分は線裝

本にまでなつている)曹家の中で最も重要な人物曹寅⁽⁵³⁾に關する最近の評價は次に引く通りだ。

曹寅の忠と玄燁(康熙帝)の愛は政治的基礎に立脚しており、ゆえなき忠と愛ではない。曹寅は玄燁の委託にそむくことなく、明末士大夫の「漢の威儀を匡復する」民族運動を消滅させ、江南地方の官吏の不正を監視し、江南の民情と生産について密奏し、玄燁に代わつて案件を處理して直接玄燁の統治に利益をもたらす場合もあつた。玄燁の曹寅への愛顧は微に入り細に入るが、後の二人——曹頤・曹頰を江寧織造とし、曹壘・曹寅以下三代四人を六十年以上も江寧織造としたのはまったく曹寅の盡忠による。こんな君臣關係は過去の封建史上ではおいそれとお目にかかれない。⁽⁵⁴⁾

曹寅の妹婿李煦については徐恭時氏の論文に詳しく、⁽⁵⁵⁾それによれば「雪芹が生まれた時、祖父(曹寅)は亡くなつていたが、大叔父(李煦)は健在だった」ので、李煦の史料には

曹雪芹に關する記載があるやも知れぬ（二人は八九年接觸があったから）ということだ。今後の李煦研究の進展に期待したい。

曹家没落については、從來皇位繼承をめぐる政治闘争に敗れたためとする見方が優位を占める。

塞思黑（胤禛）兄弟の事件に關わつた者は甚だ多い。曹頌は金獅を預かっているから塞思黑一派かも知れず、とすれば四代に亘つて恩寵を蒙つた織造が突如家産を沒收されたのも無理はない。⁽⁵⁶⁾

曹頌は十三年江寧織造を務めたが、康熙朝ではずっと特別の恩寵を得たものの、雍正朝になると雍正帝の政敵胤禔と交際があつたために排斥される。皇室内部の激しい政治闘争の中で彼は監禁査辦され、雍正五年十二月に家産を沒收されて曹家はあつと言ふ間に沒落してしまふ。⁽⁵⁷⁾

こうした見方は文革期の「情を談じて政治闘争を掩盖す

紹介

る」説の大きな據り所となつた。⁽⁵⁸⁾これに對し家産沒收の主因は多額の使い込みとする意見が出される。康熙帝とは違つて官吏の使い込みに厳しく對處した雍正帝のもとで、康熙南巡とその後遺症による使い込みの泥沼から脱し切れない曹家は、⁽⁵⁹⁾「三年以内にきちんと返済する」⁽⁶⁰⁾という約束を果たせぬまま遂に査抄の憂き目に遭つたとする。⁽⁶¹⁾

曹頌の免職・家産の沒收は主に「行爲不端にして織造の款項は虧空甚だ多し」のためだ。だからこそ在京の同族は曹頌の罪による政治的連坐を受けなかつた。……曹頌一族は落ちぶれたが、曹家の他の族人は雍正時代にも寵臣であり、ひき續き清朝統治階級のために服務している。⁽⁶²⁾

雍正帝は曹家については父康熙帝の顔に免じて寛大に處理している。なぜなら使い込みに對して雍正帝は家産を沒收して穴埋めさせるのを例としており、それは嚴重を極めて容赦無い。曹李兩家の後任の場合だと、曹家の後任隋赫徳は使い込みのため免職となつて取り調べを受け、

後任の許夢閣により徹底的に調査された。また許夢閣も情實にとらわれたとして内務府に送られて處分を受けている。李煦の後任胡鳳翬は考問のあまりのひどさに妻妾とともに自殺したし、胡の後任海保も家産没收の際に自殺している。……他人（後人を含む）から見れば厳し過ぎるようでも、雍正帝自身にすれば曹家に對しては寛大で格別の沙汰だったのだ。⁽⁶³⁾

雍正帝と曹家の政治的關係だけを擴大して取り出さずに、當時の情況一般を念頭に置いて史料を讀もうとしている。

(三)

「雪芹にはもと風月寶鑑なる書が有った」という批文は⁽⁶⁴⁾曹雪芹の執筆經過に觸れた數少ない資料として極めて重視されてきた。だが本文第1回には

後に曹雪芹が悼紅軒で披閱すること十年、増刪すること五度、目錄を編纂し回を區切つて《金陵十二釵》と題し

た。

と記すに止まる。そこで最近戴不凡氏は新たに次のような見解を發表した。⁽⁶⁵⁾

創作の過程は明らかに二段階に分かれる。まず「石兄」と稱され「石頭」と稱する作者の既に「編集して此に在り」とする「自敘傳」風の小説が、後に「情僧」に改名する空空道人に抄録されて傳奇として世に出されるが、彼は《石頭記》を《情僧録》と改める。同時にまた別人から《紅樓夢》《風月寶鑑》等の書名をつけられる。第二段階になってやっと曹雪芹が石兄の舊稿を基礎に「披閱すること十年、増刪すること五度」の末、改作して《金陵十二釵》を著わすが、これが今日言う《紅樓夢》なのだ。⁽⁶⁷⁾

戴氏の内證（本文中の證據）は次の通り。

(一) 大量の吳語

吳語吳音を使うと同時に純粹な北京方言も使って書物を著わすことは、一人の作家では不可能だし、そうする必要はない。

(二) 雪芹は賈府を南京から北京へ移す

雪芹は北京の悼紅軒(當然これも窮軒だが)で、「瓦^補電⁽²⁾」で料理をし吳音の改まらぬ作者の舊稿によって新たに小説を書いたため、賈府が南に在った痕跡を少なからず残す。こう言うとう合理的でないだろうか!

(三) 時間の逆流

敘事的作品では拙劣な作者でも描こうとする題材や故事に對して時間の觀念を持つ。だが驚いたことに上述の時間上の錯亂(十二歳の少女が十年前自分の結婚について人と語り合ったことを憶い出す等)は曹雪芹のこの「自敘」的作品の中で繰り返し現われる。

(四) 「大寶玉」と「小寶玉」

見え隠れする「大寶玉」は情操はさほど高尚でなく、性格もかなり下劣で、青埂峰の下で「日夜悲しみ恥じ

る頑石」と明らかに關係する。無邪氣で黛玉に純粹な想いを寄せる「小寶玉」(主導的地位を占める)は神瑛侍者と關係する。大小二人の寶玉の出現は明らかに舊稿に手を入れてなお統一に及んでない結果だ。

戴説は紅學界を賑わせたが、否定的な反應が多かった。⁽⁶⁸⁾ 吳語については「莫將北調作南腔」⁽⁶⁹⁾ のように戴氏の取り上げた言葉が吳語ではないとの指摘が多かったし、南北問題では「賈府は作者の藝術構想の產物」⁽⁷⁰⁾ と一蹴する意見が一般的だ。また(一)と(二)については現在紅學界でほぼ定着している、「少年時代江南で過ごし、家産沒收の後北京へ移り住んだ」という曹雪芹の傳記と絡めて「互相兼用」を合理的とする。⁽⁷¹⁾⁽⁷²⁾ (三)と(四)は創作過程に於ける思想的側面と關わるが、これについては

《風月寶鑑》は賈府の「家門沒落」の過程を描き、とりわけ貴族の生活の淫亂・腐朽ぶりを暴露した。曹雪芹は「風月」⁽⁷³⁾ の話を通じて「風情を擅^{はし}にし月貌を兼るは便ち

是れ敗家の根本」や「宿孽は總て情に因る」ということを極力説明しようとした。……年を取るにつれて曹雪芹の視野は擴がり、人生經驗も深まる。彼は封建大家族の盛衰について次第に認識を深め、生活に於ける美醜・善惡へのより正確な判断力を持つようになる。……《風月寶鑑》から《紅樓夢》になると、話の筋・矛盾や衝突・人物形象はもちろん主題思想にまで重大な變化が生じた。……新作では「妄りに風月の情を動かすのを戒める」という陳腐な主題を抛棄し、封建貴族の腐朽崩壞過程に於ける多くの矛盾をまざまざと見せつけ、時代を體現する先進的思想をもつ叛逆者とその愛情を謳歌することに力を集中した。⁽⁷³⁾

と考へ、その間に生じた小矛盾に過ぎないとする。特に四については時代的階級的限界とみなし、曹雪芹の世界觀に照らせばむしろ當然だといった意見が多い。前掲論文もそのように續けているし、

「小寶玉」と「大寶玉」の對立的統一こそ地主階級の叛逆者買寶玉である。⁽⁷⁴⁾

と大變齒切れの良い論斷を下すものもある。

戴說の「外證」は曹雪芹改作者說を批文その他の記述から裏付けようとするものだが、各批文の解釋自體に從來から分岐があり、それゆえ戴說の否定の仕方も各人各様である。⁽⁷⁵⁾ 餘りに繁雜になるためその紹介は省略する。ただ戴氏の論文が論述態度についても問題にされたことに觸れておきたい。

胡適は「石頭」等の名稱は「おそらく」曹雪芹の「假託」だろうと言う。胡適批判後八年を経て俞平伯先生もまた「石頭」等は雪芹が「故意に布いた見せかけの陣」だと言っている。言い方がそっくりではないか。だが不審を抱かせるのは俞先生ではなく、理論も材料も出せないくせに大いに胡適を罵り、痛烈に俞平伯先生を批判したかの紅學家達だ。……上述の「石頭」は「作者」

(雪芹)でないということに關わる脂批をひとたび持ち出せば、それは釜の下の薪を除くのと同じで、胡適の「おそらく」を根本から全部ひっくり返すことになるだろう。そうなると「石頭〓寶玉〓曹雪芹」という天經地義の公式も當然正真正銘の「胡說(でたらめ)」になってしまふ、とすればこの公式に基づく全ての「上層建築」、雪芹は曹頌の子だとか、雪芹の家は乾隆四五年に再度榮えそして衰えたとかの類も大荒山無稽崖下の笑話と化す。⁽⁷⁶⁾

こうした言い方には當然批判が起る。

戴不凡同志は《紅樓夢》の原作者問題についての彼の見方を述べる際、何度も非難と諷刺の口調で曹雪芹を研究したことがある人々の一部を「胡說(適)派」だと決めつけた。何の必要があるのか？ 彼の言うことが全て正しいとしても、《紅樓夢》は曹雪芹が『石兄』の《風月寶鑑》なる舊稿に巧みに手を入れて改作したものだという説が確定したからといって、人々の曹雪芹に關する研

究は本當に戴不凡同志の言うように「だめになる」のか？⁽⁷⁷⁾

ところがこれは何も戴氏一人に限らない。この記事による

哈爾濱師院學報《北方論叢》の戴不凡氏の文章にこうした美中不足があるだけでなく、最近《徐州師範學院學報》

と《南京師範學院學報》の間でも《紅樓夢》研究の専門家が曹雪芹の佚詩の眞偽をめぐって顔を眞赤にし、常軌を逸する態で論争している。⁽⁷⁸⁾ これまた何故だ？ ガミガ

ミドなれば學術上の問題が解決するわけでもあるまいに。《紅樓夢》を論ずると今も昔もどうも熱が入り過ぎるようだ。⁽⁷⁹⁾

戴氏は胡適(派)を容赦なく攻撃したが、紅學界全體としてはその復権を認めている。その底には「紅樓夢論争」から文化大革命までの紅學に對する批判と反省がある。しか

もそれは文革後の今日の課題でもあるらしい。胡文彬氏の文章⁽⁸⁰⁾によれば、

(一) 「紅樓夢論争」では學術問題と政治問題が區別されず、集中豪雨的に全面否定論が展開された。

(二) 文革前期には研究活動が全く停止し、過去の著作が檜玉に擧がって修正主義紅學派のレッテルを貼られた學者もいた。

(三) 73年に「評《紅》運動」として突然復活したが、それは影射紅學に過ぎず、狙いは周總理等を攻撃するこ⁽⁸¹⁾とだった。

(四) 三十年間に千五百篇以上の論文が發表され、テーマも多岐にわたったが系統的な研究が行なわれなかった。
(五) 紅學界には従來「門戶偏見、文風不純」の傾向があり、他人の見解を全面否定する一方、自分こそは「最も革命的で最も正確だ」と思い込んでいる——こうした事柄の根は深く、今でも餘波がある。

(五)の學風問題については《廢藝齋集稿》の紹介者吳恩裕氏に關する次のような條にも窺うことができる。

54年には彼が曹雪芹の「珍しい資料」を「獨り占め」している。「告發」した人がいるし、78年にも彼が曹雪芹の佚著を「偽造」したと「告發」した人がいる。「告發」は結局、彼の「目的」は「名利の追求」にあると言いたいのだ。⁽⁸²⁾

(三)の評《紅》運動については劉夢溪氏の回顧をめぐっていささか論戦がある。劉氏は

- ① 大衆にとっては毛澤東同志の《紅樓夢》に關する發言に基づいて自ら《紅樓夢》を研究分析し、その「政治的内容・政治的寓意」を確認するチャンスとなった。
- ② 毛澤東同志が《紅樓夢》を肯定した機に乗じ、一部の古典文學研究者は《紅樓夢》を通じて文章を書いた。そこには「寄託の要素が無いとは言えない。」

③ 評論内容は壓倒的に階級闘争に關わるものが多かった。

④ 四人組は運動を黨奪權工作の一環とみなした。

評《紅》運動も具體的分析をしなければならず、單純に全面否定或いは肯定するのはよくない。

と述べる。⁽⁸³⁾これに對して丁振海氏は、運動の方向や結論は

四人組の既定路線をなぞるものでしかなく、「紅學八股」
とでも言うべき精神の形骸化をもたらしたに過ぎないと反
論する。⁽⁸⁴⁾王志良・方延曦兩氏も

紅學の研究領域で流された四人組の害毒はかなり深く、
鬭争無しでは取り除けない。ところがこの正常化工作が
始まったばかりだというのに、《紅學三十年》はこれに
強烈な不満を洩らしている。⁽⁸⁵⁾

と強烈な不満を洩らしている。一方劉氏は

私が73年から74年にかけての評《紅》運動を四つの情況
に分けた狙いは、一部の古典文學研究者及び大衆と四人
組の陰謀とを區分することだ。⁽⁸⁶⁾

と答え、丁氏の言う「贊美と辯護」などともない話だ
とする。《論鳳姐》⁽⁸⁷⁾をめぐって丁氏は

王朝聞同志の力作《論鳳姐》は「評紅熱」の時期に完成
していたが、四人組が粉碎されてやっと廣範な讀者の前
に姿を現わすことができた。⁽⁸⁸⁾

と言い、劉氏は

一部の古典文學研究者について、私が毛澤東同志が《紅
樓夢》を肯定した機に乗じ、彼等はこの書を通じて文章
をものしたが、そこには寄託の要素があると述べたこと
は當時の眞實と完全に合致する。必要とあらば多くの實
例を擧げてよい。丁振海同志も王朝聞同志の《論鳳姐》

の執筆例を挙げたではないか。⁽⁸⁹⁾

と答えている。^{補(3)}

それでは(一)の問題に戻ろう。要するにここでも全面否定論の見直しが行なわれている。胡適の政治態度は批判されるべきだが、紅學史上の業績は正當に評價しなければならぬ、と言ふ。

胡適が開いた《紅樓夢》考證學及びその成果は他の新紅學派研究者に引き繼がれて發展を遂げたのみならず、今日でも我々多くの紅學家に承認され利用されている。⁽⁹⁰⁾

胡適の《紅樓夢》關連史料の搜集・分析は我々に《紅樓夢》の誕生について若干の正しい認識を持たせた。⁽⁹¹⁾

許德政氏は更に一步進んで胡適を擁護しているようだ。⁽⁹²⁾その小題目を見ると

(一) 「自傳説」は《紅樓夢》の作者の創作理由と故事取材に對して行なつた説明と符合する

(二) 脂硯齋の評注は「自傳説」に有力な證據を提供した

(三) 胡適が《紅樓夢》の作者の平生や家世について行なつた種々の考證は「自傳説」に新たな證據を提供した

許氏は胡適の使つた「自然主義」の概念についても、當時は今日ほど明確ではなかつたとし、「胡適が《紅樓夢》は平淡無奇な自然主義の傑作だと言つたことに貶める意圖は無い」と言ふ。⁽⁹³⁾また胡適の書が復印されたことも彼の學術上の復權を物語る。⁽⁹⁴⁾

四

《廢藝齋集稿》が紅學界を賑わせたのも記憶に新しい。⁽⁹⁵⁾

その眞偽をめぐる經緯については伊藤漱平氏の論文に詳しいので省略し、その後に見發見紹介された幾つかの佚著遺品及び眞偽論争の概要を記す。紹介者は《廢藝齋集稿》と同じく吳恩裕氏で、⁽⁹⁶⁾

(一) 曹雪芹が繪畫は自然を手本にすること、及び繪畫と光の關係を論じた殘篇

(二) 曹雪芹が絹織物について講じた殘篇

(三) 最近發見された曹雪芹の遺品である一對の本箱

の三點である。⁽⁹⁷⁾ また《人民畫報》では

(四) 曹雪芹の塑像

(五) 「芹溪尊兄大人正之」と刻まれた扇骨

等も紹介されている。⁽⁹⁸⁾ (一)は《廢藝齋集稿》中園林の建造を講じた《岫裏湖中瑣藝》の殘篇で、繪畫と光の密切な關係を《烏金翅圖》を用いて具體的に説明した部分、(二)も同じく編織工藝部分の殘篇である。そしてこの紹介の中で最大の比重を占めるのが(三)の本箱だと言えよう。

我々これまで《紅樓夢》の作者曹雪芹の親筆を見たことがなかった。《文物》73年2期に私が發表した《南鶴北

鳶考工志》の自序も親筆の雙鉤字に過ぎない。ところが今我々は彼の親筆を發見し、同時に意外にも彼の後妻の親筆の悼亡詩をも發見した。これらの發見は曹雪芹の平生についてより多くの事實を教えてくれるばかりか、過去に發見した《廢藝齋集稿》の殘篇が間違いなく曹雪芹の著作であることも證明してくれる。⁽⁹⁹⁾

吳氏は收藏者の張行氏を曹雪芹の友人張宜泉の子孫と考え、曹雪芹の後妻「芳卿」が寡婦となって江南へ歸る際に張宜泉に贈ったのではないかと言う。また本箱の左下に小さく「于」と刻まれていることから、《廢藝齋集稿》と關係の深い于叔度が先ず所有し、後に張宜泉に歸したのかも知れないとも述べる。「芳卿」については江南時代の曹家の舊戚で、本箱に刻まれた《題芹溪處士句》⁽¹⁰⁰⁾末尾の「乾隆二十五年歲在庚辰上巳」前後に結婚し、《廢藝齋集稿》との關係も深かったとする。そして彼女の悼亡詩から、曹雪芹は「癸未除夕」に酒の飲み過ぎが祟って腦溢血か何かで急逝したのではないかと推測する。⁽¹⁰¹⁾ また己卯本と庚辰本の研究⁽¹⁰²⁾

に力を注いだ馮其庸氏は

本箱上にある四十二個の行書字の風格は確かに乾隆期の
脂評抄者のそれと極めて一致する。だからこの行書字は
乾隆期の風格を持つと言うのには十分な根據がある。兩
者は同一人の筆蹟かも知れない。⁽¹⁰⁸⁾

と述べる。

一方《廢藝齋集稿》の場合と同じく、これらの新發見文
物に對しても疑問を挟む聲が少なくない。まず(五)について
は香港文滙報に扇骨上の題識が《漁洋詩話》の記述と全く
一致することなどから曹雪芹との關係を疑う聲が⁽¹⁰⁹⁾あがり、
「芹溪尊兄大人正之」の「大人」の歴史的な使われ方から
見て、光緒年間の文物だとする意見も⁽¹⁰⁵⁾出た。郭若愚氏は(四)
についてやはり清末のものだと述べた後、(四)についても泥
塑でなく陶塑だとし、雕塑の専門家も「作られて五十年を
越えない」と語ったと記す。續いて本箱に觸れ、

一つの本箱の内側には、曹雪芹の書になる五條の書目と
後妻の親筆の悼亡詩がある。これは私には極めて不正常
に思える。私は數十年圖書とつきあい、こんな本箱を見
たことも少なくないし、自分でも使うことがある。けれ
ども箱の内側(或いはふたの裏側)にこんな精巧に書かれ
た字を見たことはないし、私自身も箱やふたの裏側に何
か書こうなどと考えたこともない。本箱は面積が廣くて
比較的重く、また置いたままにして動かさぬものだ。
何か書きつけようとすればとても面倒だし、實際そんな
必要もない。それでも必要とあらば大きな字を幾つか書
けはするが、「曹雪芹」のように精巧に書くのは無理だ。
私ならまず書目を紙に書いて、それから箱に貼りつける
だろう。その方がずっと簡單だ。「曹雪芹」は芳卿の五
條⁽¹⁰⁾しか書いてないが、他の書目に及ばぬのはなぜだ？
芳卿は悼亡詩を作ったが、箱板に起草して御苦勞なこと
だ。紙に書けばずっと簡單なのに。貧しいとはいえ、詩
を一首起草するだけの紙が無い筈はない。こうした不合
理な現象はそこに完全な意識的行動があることを印象づ

ける。⁽¹⁰⁶⁾

と疑問を呈す。朱家潛氏も書目に見える「紋様」は近代の語彙で、曹雪芹の時代には無かったと述べる。⁽¹⁰⁷⁾《廢藝齋集

稿》以後の各種文物の眞偽に對する結論はまだ出ていない。⁽¹⁰⁸⁾

曹雪芹の佚著遺物についてはまだ曖昧な點が残るが、程偉元に關する新資料は彼を一介の書商とする從來の見方を覆した。文雷氏によれば程偉元は乾隆十年前後に生まれ、嘉慶二十三、四年に死んだらしい。蘇州の封建世家の出身で、文學藝術面での才能も高翳より優れる。そこで

程偉元が《紅樓夢》校印の發起人・主宰者であり、主編者でもあって、高翳は彼の協力者・助手である。⁽¹⁰⁹⁾

と兩者の關係を逆轉させる。ついで晉昌（太宗の後裔。程偉元は彼の幕僚であり詩友であったと文雷氏は言う。）の嘉慶七年の誕生日に程偉元が描き贈った《羅漢冊》が紹介されたが、⁽¹¹⁰⁾これには「古吳程偉元」とあり、文雷氏の推測が裏付けら

紹介

れた。更に王爾烈の古稀の祝いに描き贈った『雙松并茂圖』も發見され、彼が《紅樓夢》の收集・整理・出版工作に耐え得る能力の持ち主だったことが明らかになった。⁽¹¹¹⁾

版本の面では「己卯本」の影印刊行が特筆される。「己卯本」は董康・陶洙といった人の所藏を経て解放後北京圖書館に歸したが、第一至第二十、第三十一至第四十、第六十一至第七十の四十回（そのうち第六十四・六十七の兩回は補配）が傳わるだけだった。ところが一九五九年に中國歴史博物館が琉璃廠の中國書店から購入した第五十五回後半から第五十九回前半までの「三回又兩半回」が實は「己卯本」であることが突き止められた。⁽¹¹²⁾ 今度の影印本はその新發見部分も含む。ところでこの影印本をめぐってちよつとした應酬がある。「己卯本」にはかなり陶洙の手が入っていて

この本を収めた後陶洙は校録補鈔を進め、(一)第一至第十回の殘缺部分を補い、(二)「庚辰本」によって第二十一至第三十回を抄補し、(三)藍筆で「甲戌本」の批語全部と凡例を、朱筆で「庚辰本」の批語全部を過録し、また兩本

よって「己卯本」を校改した。陶洙がこの作業を進めたのは當然この殘缺本を抄補して完全にせんが爲だが、彼には思いも寄らず、そうすることで「己卯本」の原状をすっかり破壊してしまった。特に朱筆で墨筆の正文を校改したことは、「己卯本」にもとからある朱筆旁改の字とのきちんとした區別を難しくし、そこでこの本の研究に大きな困難をもたらした。これはもちろん彼が予想できなかったことだ。⁽¹⁴⁾

そこでこの「眼花繚亂」の抄本の原状回復をはかり、

この影印本は「己卯本」の原状を回復するために、陶洙が過録した「甲戌」「庚辰」兩本の脂硯齋の批語を、眉批や行間批も含めて全部削除した。正文を旁改した朱筆については、彼の筆蹟と確定できるものは全部削除、もとの朱筆か陶洙のものか判じ難い場合には全部保留して今後の研究に備え、もとからある朱筆旁改文字と確認できるものは全部保留し、この抄本のもとの姿を保存

した。

この作業については、「これこそ古籍を整理する場合の謹嚴な科學的態度だ」と稱贊する聲もあるが、⁽¹⁵⁾また逆に失望を表明するものもある。應必誠氏は後から發見された「三回又兩個半回」が「一體墨色」であることから發して

「己卯本」のもとの姿は「一體墨色」で、朱色の改筆は「己卯本」散失以後の收藏者が行なった校改だ。そうすると《論庚辰本》で言う所の「己卯本」抄藏者が「庚辰秋定本」によって校改したという問題も存在しないし、《論庚辰本》で分析した所の「己卯本」から「庚辰本」に至る過程の眞實性も打ち消される。こうした過程は存在しない。⁽¹⁶⁾

と、馮氏の「己卯」「庚辰」兩本に對する考え方を⁽¹⁷⁾も退け、それに従って施された處理を下策だとする。馮氏はこれに答えて、(一)陶洙の抄補については彼自身の詳細な記録があ

る、(二)現存「己卯本」上には確かに陶洙のではない文字がある、(三)孤立した一、二個の文字は抄者を確定し難い、といったことから削除と保留の二本立てで臨んだとし、逆に

僅か「三回又兩個半回」の白文から怡府抄藏の「己卯本」の八十回全部がそうだったと證明しようとするのは、データー不足に思えるし、時期尙早だ。⁽¹¹⁸⁾

と述べる(新発見部分の「一體墨色」の原因については今後の研究が必要だとする)。

最後に八十回以後の情節に關する推測を二つ紹介したい。現行一百二十回本では黛玉の死に寶玉と寶釵の結婚が絡み、黛玉が恨みを吞んで死んだために、二百年來「黛玉哀し、寶釵憎し」が主流を占めてきた。これに對して蔡義江氏は「千里伏綫」を多用する《紅樓夢》の構造や批文を重視して全く別の展開を考える。⁽¹¹⁹⁾ それによれば、黛玉はやはり涙を流し盡して死んだのである。

紹介

秋	春	冬	秋
<p>「前縁を證す」(第79回批)</p> <p>「どれほど涙があったとて、耐えられませぬ、秋冬そして春夏までも」(第5回)</p>			
<p>死</p>		<p>涙</p>	
<p>家に歸り、黛玉の死を知る。</p> <p>寶釵を娶るも、黛玉を失った悲しみは大きく遂に出家する。</p>		<p>抄没の結果、「不才之事」により獄神廟に繋がる。</p> <p>「寒冬酸齏に噎び、雪夜破毡を圍む」(第19回批)の生活。</p>	
<p>黛玉</p>		<p>寶玉</p>	
<p>離婚</p>		<p>別約</p>	

元春の死についても謎である。彼女の判詞中の「虎兕相逢いて大夢歸す」に妥當な解釋を得られないためだ。現行一百二十回本ではこの年は甲寅の年で十二月十八日が立春、十九日に死んだので卯年の寅月に入っていたと説明する。

近年では曹家の命運の轉折點である康熙帝の死（康熙16年壬寅）と雍正帝の即位（雍正元年癸卯）の相逢う意味だとする解釋が目新しい。これに對して楊光漢氏は「虎兕」を二人の人物だとする。⁽¹²⁾ 楊氏の論據は秦可卿出殯（第14回）に於いて

六名の官客を紹介した正文に對する批語である。それは官客の命名法が十二支を下敷きにすることを説明するが、楊氏は「現國公柳彪之孫現襲一等子柳芳」の批語「柳は卯の字にあたる。彪は虎の字にあたり、寅の字を寓する。」に注目し、「虎」と逢ったのは柳姓の人物だと考える。そして書中の柳姓の人物（柳彪・柳芳・柳家的・柳五兒・柳湘蓮）の中では柳湘蓮以外該當者は無いとする。一方「虎」は正月（寅月）一日に生まれた元春を指すので、問題の句は元春が柳湘蓮に逢って死んだことを意味すると言う。また判詞の「榴花開く處 宮闈を照らす」の「榴」も柳の諧音だと言

う。更に「好了歌」（第1回）の「日後強梁を作す」の批語に「柳湘蓮一千人」とあるのも重視する。そして次のような展開を想定する。

- (一) 柳湘蓮の起義軍が京師に迫る。
- (二) 四大家族に虐げられた奴隸達が決起する。
- (三) 邢夫人や趙姨娘が暗躍する。
- (四) 他の政治集團が四大家族を攻撃する。
- (五) 元春も省親の時に哭いたことを告發される。
- (六) 時局混亂の責任が全て四大家族にかぶせられ、皇帝は元春に死を賜う。

以上幾つかの點について紅學界の現状を紹介してきたが、あくまでほんの一部に過ぎない。80年6月にはアメリカのウィスコンシン大學で第一回國際《紅樓夢》研討會が開かれ、また中國《紅樓夢》學會やその各省分會も次々に成立しつつある。デビッド・ホークス氏の英文譯も第三冊（第

54回至第80回。THE WARNING VOICE)が出版され、松枝茂夫氏の改譯も最終第十二冊を残すだけとなった。伊藤漱平氏は三度目の翻譯を目指しているらしい。この紹介文もすぐに時代遅れになってしまおうだろう。^{補⑥}

81年12月1日記

この春には「庚辰本」を底本とする《紅樓夢》校本が人民文學出版社より簡體字で出版された。(後四十回は「程甲本」全三冊で發行部数は46萬5千部。馮其庸氏が中心となり、作業は75年から始まったと言う。前八十回の校勘に使われた諸本は、(一)甲戌本、(二)己卯本、(三)蒙古王府本、(四)戚蓼生序有正書局本(蘇平伯校本の底本)、(五)戚蓼生序南京圖書館藏本、(六)甲辰本、(七)己酉本、(八)鄭振鐸藏本、(九)《紅樓夢稿》本、(十)程甲本、(十一)程乙本で、各回末に校勘記を附す。多分計畫されているとは思いますが、^{補⑦}《脂硯齋紅樓夢輯評》増訂本の一日も早い出版を希望する。

82年5月1日追記

紹介

注

- (1) 魯德才「重視《紅樓夢》藝術創作經驗的研究」(《紅樓夢學刊》81・1)
- (2) 魯迅「中國小說的歷史的變遷」
- (3) 注(8)とともに文革中にも盛んに引かれる。
我們在三大革命鬥爭實踐中、用馬克思主義的立場・觀點・方法閱讀《紅樓夢》、使我們更加痛恨封建社會地主階級專政的罪惡；他的真正價值、在於通過鮮明的藝術典型、形象地反映了封建社會階級鬥爭的歷史；尤其對我們這些沒有親見過封建社會的年輕一代、他在幫助我們認識封建社會這一點上、確實能起到歷史教科書不易具有的作用。(傳統的思想和寫法都打破了) 武漢大學中文系七二級評《紅》組《我們是怎樣讀《紅樓夢》的》所收) など。
- (4) 韓進廉「試論《紅樓夢》在中國文學史上的地位」(河北師範大學學報80・3)
- (5) 文致和「論薛寶釵」(《紅樓夢學刊》80・4)
- (6) 滕雲「曹雪芹典型觀初探」(《紅樓夢學刊》79・2)
- (7) 吳戈「評薛寶釵」(《江淮論壇》80・4)
- (8) 魯迅「集外集拾遺」《絳洞花主》小引
- (9) 柏青「封建末世的歷史畫卷」(北京日報74年9月28日)
- (10) 徐中元「簡論《紅樓夢》的愛情主題及其意義」(《實踐》80・1・2)

- 林文山「評『愛情掩蓋』說」(學術研究81-1)
- 汪征魯「政治歷史小說」一詞質疑」(福建師大學報80-1)
- 洪家森「《紅樓夢》是『政治歷史小說』嗎?」(武漢師院漢口分部校刊80-1)
- 汪宗元「《紅樓夢》是一部政治歷史小說嗎?」(寧夏大學學報80-4)
- (11) 石兄と空空道人の對話(第1回)を指す。
- (12) 扎拉嘎「將眞事隱去」「用假語村言」(《紅樓夢研究集刊1》)
- (13) 王夢阮・沈瓶庵《紅樓夢索隱》
- (14) 蔡元培《石頭記索隱》
- (15) 許德政「紅樓夢」自傳說「平議」(學習與探索81-5)
- 而江青在解釋《紅樓夢》中「甚荒唐、到頭來都是爲他人作嫁衣裳」這句話時、也說什麼「到頭來漢人爲滿人做嫁衣裳」。這豈不是舊紅學索隱派在新歷史條件下的復活嗎?
- (16) 紅學史については郭豫適《紅樓研究小史稿》(上海文藝出版社80年1月)・《續稿》(81年8月) 参照。
- (17) 注(12)に同じ。
- (18) 如今畫這園子、非離了肚子裏有幾幅邱壑的、如何成得。這園子卻是像畫兒一般、山石樹木、樓閣房屋、遠近疏密、也不多、也不少、恰恰的是這樣。你就照樣兒往紙上一畫、是必不能討好的。這要看紙的地步遠近、該多該少、分主分賓、該添的要添、該減的要減、該藏的要藏、該露的要露、這一起了

- 稿子、再端詳斟酌、方成一幅圖樣。(第42回)
- (19) 韓進廉「關於曹雪芹的美學觀」(《紅樓夢學刊81-2》)
- (20) 金開誠「從《紅樓夢》看曹雪芹的詩論」(《紅樓夢研究集刊4》)
- (21) 蔡義江《紅樓夢詩詞曲賦評注》(北京出版社79年10月) 中の「《紅樓夢》中的詩論選注」参照。
- (22) 張春樹「《紅樓夢》結構簡論」(《紅樓夢學刊81-3》)
- (23) 護官符(第4回)、元春哭泣(第18回)、禪唐臭漢(第63回)など。
- (24) 蘇鴻昌「論《紅樓夢》中的『眞』『假』觀念」(《紅樓夢學刊80-1》)
- (25) 陳俊山・楊志傑「試論《紅樓夢》語言藝術的特點」(《紅樓夢研究集刊4》)
- (26) 徐遲「如何對待脂硯齋」(《花城80-3》)
- (27) 徐遲論文に先行するものとして、郝延霖「沒落貴族的哲學——論《石頭記》的脂硯齋評」(新疆大學學報79-1及び2)があるが未見。
- (28) 葉朗「不要輕易否定脂硯齋的美學」(學術月刊80-10)
- (29) 前注に同じ。
- (30) 孫遜「脂評」思想藝術價值淺探」(《紅樓夢學刊80-2》)
- (31) 陳熙中「說『眞有眞事』」(北京大學學報80-5)
- (32) 注(27)の郝延霖氏も「獨創的藝術分析」(《紅樓夢學刊81-1》)では次のように述べる。

但他絕非言之無物的空談、特別是作為《石頭記》的最早的評論來看、不僅是難能可貴的、而且也是富有獨創性的、應該予以研究總結。

- (33) 馮其庸「曹雪芹家世新考」(社會科學戰綫78・1及び2)
(34) 周汝昌《紅樓夢新證》第三章「籍貫出身」參照。
(35) 馮其庸《曹雪芹家世新考》(上海古籍出版社80年7月)
(36) 康熙54年3月7日の曹頌の奏摺に、「奴才之嫂馬氏、因現懷妊孕已及七月、恐長途勞頓、未得北上奔喪、將來倘幸生男、則奴才之兄有在矣。」とある。
(37) 注(35)に同じ。
(38) それぞれ第2回、第22回、第1回。
(39) 王懷湘「曹雪芹并非遺腹子」(紅樓夢研究集刊3)
(40) 王利器「馬氏遺腹子・曹天祐・曹霑」(紅樓夢學刊80・4)
(41) 上天同雲、雨雪雰雰、益之以霡霖、既優既渥、既霑既足、生我百穀。……中田有廬、疆場有瓜、是剝是菹、獻之皇祖、曾孫壽考、受天之祜。(小雅信南山)
「祜」と「祐」について王氏は次のように説明する。——嘉慶21年に阮元が刊刻した《十三經注疏》本ではじめて「受天之祜」と定めた。曹寅の《棟亭書目》卷一の「經」には「十三經注疏」、明國子監祭酒李長春奉敕校刊、北版、九十四冊」とある。この本は阮元の《校勘記》の言う「南監本」に他ならない。また卷二の「詩」には「詩經白文」四卷、明竟陵鍾

紹介

- 惺評點、一冊」とある。現在見ることが出来る曹寅の藏本と同じ明監本《十三經注疏》と竟陵鍾惺伯敬父批點・明吳興凌杜若朱墨套印本《詩經》は、どちらも「受天之祐」と作っている。つまり「天祐」という名は曹氏の楹書にもとづくわけ、後の嘉慶期の阮元刊本の異同にとらわれて「霑」と「天祐」の文字上の關係を疑ってはならない。
(42) 求信「曹雪芹之父親是曹頌嗎？」(紅樓夢研究集刊3) 蔣曉前「淺談曹雪芹的血統關係」(紅樓夢研究集刊5) 劉夢溪「曹雪芹的時代和《紅樓夢》的創作」(社會科學輯刊80・5)
(43) 注(35)に同じ。
(44) 梅挺秀「曹雪芹卒年新考」(紅樓夢學刊80・3)
(45) 徐恭時「文星隕落是何時?——曹雪芹卒年新探」(紅樓夢學刊81・2)
(46) 確認される壬午年の批文の數(各本の重複分は省く)は、壬午春10條、壬午季春12條、壬午孟夏7條、壬午孟夏雨窗3條、壬午夏雨窗3條、壬午雨窗2條、壬午重陽(日)2條、壬午九月5條。
(47) 向忻「《紅樓夢》研究の一場浩劫」(河北師院學報81・1)
(48) 蔡義江「紅學的由來」(書林81・4) 參照。
(49) 馮其庸「關於當前《紅樓夢》研究中的幾個問題」(北方論叢81・2)
(50) 「俞平伯和顧頡剛討論《紅樓夢》的通信」(紅樓夢學刊

- 81-3) 参照。また曹家に關する考證については「《紅樓夢》討論通信」(中華文史論叢81-4) 参照。
- (51) 故宮博物院明清檔案部編「關於江寧織造曹家檔案史料」(中華書局75年3月) 及び「李煦奏摺」(同76年5月)
- (52) 人民文學出版社76年4月。
- (53) 曹寅の《棟亭集》は78年12月に上海古籍出版社から景印出版された。
- (54) 劉長榮「玄燁和曹寅關係的探考」(紅樓夢學刊81-2)
- (55) 徐恭時「那無一個解思君——李煦史料新探」(紅樓夢研究集刊5)
- (56) 李玄伯「曹雪芹家世新考」(故宮週刊85及び86)
- (57) 吳新雷「關於曹雪芹家世的新資料」(南京大學學報76-2) 注(62)馬希桂論文より轉引。
- (58) 寶玉が四兒を引き立てた箇所(第21回)に「四字誤人甚矣」という批文があるのをとらえて、「これは康熙帝の第四子だった雍正帝を諷したものだ」とする説が流布した。(實は四兒を形容した「聰敏乖巧」の四字を指す。これがもとで四兒は後に大觀園から逐われる。)
- (59) 江寧織造の政治的意義は大きいが、年俸は一百五兩に過ぎない。康熙南巡の接待といった派手な活動を支えたのは曹寅と李煦のもう一つの顔——多額の耗羨(官吏の副収入となる附加税)を生じる巡鹽御史という職務である。注(61)参照。
- (60) 曹頌奏摺(雍正二年正月初七日)

- (61) 黃進德「曹雪芹家敗落原因新探」(紅樓夢研究集刊4)
- (62) 馬希桂「從清代檔案看曹頌被抄家的主要原因」(故宮博物院院刊80-3)
- (63) 謝興堯「從曹家的事情談清朝掌故」(西北大學學報81-1)
- (64) 甲戌本第1回眉批。
- (65) 80年2月18日死去、58歳。
- (66) 曹雪芹改作者説の古い例としては戴氏も引く裕瑞の《癸窗閑筆》がある。——聞舊有《風月寶鑑》一書、又名《石頭記》、不知何人之筆。曹雪芹得之、乃以近時之人情諺語來寫而潤色之、借以抒其寄託。
- (67) 戴不凡「揭開《紅樓夢》作者之謎——論曹雪芹是在石兄《風月寶鑑》舊稿基礎上巧手新裁改作成書的」(北方論叢79-1)
- (68) 曹雪芹改作者説を取るものとして、孔祥賢「紅樓夢原作者是誰」(北方論叢79-5及び80-4)がある。
- (69) 傅增亨論文(紅樓夢學刊80-2)
- (70) 扎拉嘎「關於《紅樓夢》的作者問題」(紅樓夢研究集刊2)
- (71) 嚴雲受「《紅樓夢》作者問題論辨」(紅樓夢研究集刊4)
- (72) 石兄と曹雪芹について戴氏は「石兄和曹雪芹——《揭開紅樓夢作者之謎》第二篇」(北方論叢79-3)の冒頭で、「石兄是曹寅胞弟曹荃的次子(？竹村)、生平待詳。曹雪芹——

可以肯定地說、一非曹寅曹荃兄弟的嫡系子孫；二非曹顯曹頌之子。」と述べるが、戴氏が考證を費やした「竹村」は李煦の號であり、この新説は問題にされていない。

(73) 注(71)に同じ。

(74) 張錦池「《紅樓夢》的作者究竟是誰——與戴不凡同志商榷」(北方論叢79-3)

(75) このテーマをめぐるは他に

陳熙中・侯忠義「曹雪芹的著作權不容輕易否定——就《紅樓夢》中的『吳語詞匯』問題與戴不凡同志商榷」(紅樓夢學刊79-1)

鄧遂夫「脂批就是鐵證——關於《紅樓夢》作者問題與戴不凡同志商榷」(紅樓夢學刊79-2)

蔡義江「脂評說《紅樓夢》作者是曹雪芹」(文藝研究79-12)

薛瑞生「石兄(石頭)說」質疑」(文藝研究80-2)

李少清「也談《紅樓夢》的著作權問題」(北方論叢79-5)

王孟白「關於《紅樓夢》著作權問題」(北方論叢79-5)

張碧波・鄭進先「駁『《紅樓夢》舊稿爲石兄所作』說」(北方論叢79-5)

戴不凡「秦可卿晚死考——石兄《風月寶鑑》舊稿探索之一節」(文藝研究79-1)

劉夢溪「秦可卿之死與曹雪芹的著作權」(文藝研究79-2)

馬欣來「《秦可卿晚死考》質疑」(紅樓夢學刊80-3)

戴不凡「曹雪芹『拆遷改建』大觀園」(紅樓夢學刊79-1)

等がある。

(76) 注(67)に同じ。

(77) 徐開壘「《紅樓夢》研究的題外話」(文匯報79年3月21日)

(78) 問題の佚詩は徐恭時《評〈紅樓夢〉》(參考資料)(上海人民出版社74年8月)に載る。ここで指摘された論文は、(一)

陳方「曹雪芹佚詩」辨偽」(南京師範學院學報77-4、未見)、(二)吳世昌「曹雪芹佚詩的來源與真偽」(徐州師範學院學報78-4、《紅樓夢探源外編》所收) なお鍾古月「曹雪芹佚詩」出于誰的手筆」(紅樓夢研究集刊2)によれば、周汝昌氏が「曹雪芹の手筆」能「假託嗎？」(教學與進修79-2)

で、問題の佚詩は70年秋に目分が「假託續補」した三首の一つだと告白したそうである。

(79) 己卯春、余は伯謙と此の書を論じ、一言も合わずして遂に相い齟齬す。幾ど老拳を揮わんとするも、毓仙これを排解す。是に於いて兩人誓いて共に《紅樓》を談せず。(鄭澂《三借廬筆談》)

(80) 胡文彬「《紅樓夢》研究三十年」(學習與探索80-2)

(81) 周恩來は賈政に擬せられた。

(82) 林里夫「哀悼不幸早逝的吳恩裕同志」(紅樓夢學刊80-2)

(83) 劉夢溪「紅學三十年」(文藝研究80-3)

(84) 丁振海「也談『文革』中的『評紅熱』」(文學評論81-1)

(85) 王志良・方延曦「評《紅學三十年》」(文學評論81-3)

- (86) 劉夢溪「讀《也談『文革』中的『評紅熱』》書後」(文學評論81-3)
- (87) 王朝聞《論鳳姐》(百花文藝出版社80年4月)
- (88) 注(84)に同じ。
- (89) 注(86)に同じ。
- (90) 魏同賢「胡適的紅樓夢考證在紅學史上的地位」(紅樓夢學刊79-1-2)
- (91) 王延齡「略論新紅學派」(讀書80-1-7)
- (92) 注(15)に同じ。
- (93) 現在の概念では《金瓶梅》が自然主義の代表作。なお文學史上の《紅樓夢》の地位については
楊志傑・陳俊山「論《紅樓夢》的繼承與革新」(紅樓夢學刊79-1-1)
- 蔣和森「《紅樓夢》與中國文學的發展」(紅樓夢學刊81-1-2)
- 張俊・武靜寰「寶黛愛情描寫在中國小說史上的地位」(紅樓夢學刊81-1-2)
- 周中明「《紅樓夢》是怎样打破傳統思想和寫法的？」(紅樓夢研究集刊4)
- 韓進廉「試論《紅樓夢》在中國文學史上的地位」(河北師範大學學報80-1-3)
- 張俊「試論《紅樓夢》與《金瓶梅》」(北京師範大學學報81-3) 等を参照。
- (94) 《中國章回小說考證》(實業印書館42年)が80年に上海

書店から複印刊行された。

- (95) 伊藤漱平「晩年の曹浩の『佚著』について——『廢藝齋集稿』等の眞價をめぐる覺書」(加賀博士退官記念中國文史哲學論集)
- (96) 79年12月12日死去、70歳。
- (97) 「曹雪芹佚著遺物的發現」(人民畫報79-1-8) 日本語版では「紅樓夢」の著者曹雪芹の佚著遺品を發見」(中國畫報79-1-8)
- (98) 吳恩裕「新發現的曹雪芹佚著和遺物」(紅樓夢學刊79-1-1)
- (99) 前注に同じ。
- (100) 并蒂花呈瑞、同心友誼眞、一拳頑石下、時得露華新。
——結婚を祝う詩。この本箱は結婚記念として曹雪芹に贈られたのだと言う。
- (101) 吳恩裕「曹雪芹之死」(十月2) 参照。なお吳氏の論考は《曹雪芹佚著淺探》(天津人民出版社79年11月)と《曹雪芹叢攷》(上海古籍出版社80年2月)にまとめられている。
- (102) 馮其庸《論庚辰本》(上海文藝出版社78年4月)
- (103) 馮其庸「二百年來的一次重大發現——關於曹雪芹的書篋及其他」(紅樓夢學刊80-1-1)
- (104) 寒操「眞乎？假乎？曹雪芹的又一件的遺物——折扇」(香港文匯報79年8月11日)
- (105) 石魚「『曹雪芹折扇』和『大人』的呼稱」(紅樓夢研究集

刊5)

- (106) 郭若愚「有關曹雪芹若干文物質疑」(紅樓夢研究集刊3)
- (107) 朱家潛「漫談假古董」(紅樓夢研究集刊3)
- (108) 現在《紅樓夢》の研究專刊には、文化部文學藝術研究院編の《紅樓夢學刊》と社會科學院文學研究所編の《紅樓夢研究集刊》の二種類がある。時をほぼ同じくして二種類の專刊が出たことにはそれなりの理由があるのだろうが、曹雪芹の佚著遺物について《學刊》の論文は肯定説、《研究集刊》の論文は否定説と、はっきり分れている點が氣にならなくもない。
- (119) 文雷「程偉元和《紅樓夢》」(文物76-10) なお「文雷」は胡文彬・周雷兩氏の合稱。
- (110) 史樹清「跋程偉元羅漢冊及其他」(文物78-2)
- (111) 鄭寶庫「新發現程偉元的《雙松并茂圖》」(紅樓夢學刊81-2)
- 馬國權「程偉元在遼寧」(紅樓夢學刊81-3)
- (112) 上海古籍出版社80年5月。
- (113) 吳恩裕・馮其庸「己卯本」《石頭記》散失部分的發現及其意義」(光明日報75年3月24日)
- (114) 馮其庸「影印《脂硯齋重評石頭記》己卯本序」
- (115) 楊廷福「略談古籍影印的一個問題——欣讀影印《脂硯齋重評石頭記》己卯本」(文滙報81年6月8日)
- (116) 應必誠「關於《石頭記》己卯本和己卯本的影印」(中國

紹介

社會科學81-2)

- (117) 怡親王府が脂硯齋四閱評を經た「己卯冬月定本」(己卯原本)を借抄し、その後「庚辰秋月定本」(庚辰原本)を借りて校改(徑改・貼改・夾條改)を行なった。この「己卯原本」からの直接の過録本が現存「己卯本」である。一方現存「庚辰本」は現存「己卯本」の過録本で、その肩批と行間批は別本から過録した。——注(102)参照。
- (118) 馮其庸「關於己卯本的影印問題及其他」(社會科學戰綫81-3)
- (119) 注(21)の64頁参照。また「曹雪芹筆下的林黛玉之死——《紅樓夢論佚》中之一章」(紅樓夢學刊81-1)にも詳しい。
- (120) 楊光漢「論賈元春之死——《雪芹胸中有共工》第七章」(社會科學輯刊80-3)
- 補(1) 第76回に見える語。英譯は楊憲益・戴乃迭夫妻譯の“A DREAM OF RED MANSIONS”(北京外文出版社)による。
- 補(2) 第1回前回總批に「茅椽蓬牖、瓦竈繩牀」と見える。素燒の粗末な炊飯具で、戴氏はこれが江南の下層民の日用品であることを強調する。
- 補(3) この論戦については、石言「紅學爭鳴報道」(紅樓夢學刊81-4)や《紅樓夢學刊》82-1の「紅學爭鳴」の三篇の論文を参照。

補(4) 否定的立場を取る伊藤氏の論文は徐允平氏によって中文譯された。(紅樓夢研究集刊7)

補(5) 爲芳卿編織紋様所擬訣語稿本。

爲芳卿所繪彩圖稿本。

芳卿自繪編錦紋様草圖稿本之一

芳卿自繪編錦紋様草圖稿本之二

芳卿自繪織錦紋様草圖稿本

補(6) 胡文彬「論紅學的歷史形成及其研究」(紅樓夢學刊82
11) 參照。

補(7) 前注論文でも同様の希望が述べられる。但し、陳慶浩

「新編紅樓夢脂硯齋評語輯校」(72年香港)で十分だとし、
新たな増訂工作に格別の意義を認めない意見もある。(82年
10月に來日した社會科學院文學研究所代表團の座談會での發
言)

(京都大學 井波陵一)